

家吉平記圖書

六

13
1830
12



1830
12



車輪比如何一豈滅危かごらん平

宗任以下出降人

去程小將軍頼義所之軍に打勝りて要渡の地と聞ける厨川橋と致為一
 賊首厨川比即安倍貞任舍身比浦六郎重任一子千世童子兵小謀叛の張本巨
 理指を交藤原経清等孤株獄一國中王化小服して若民案治一たりけるを
 伴の與黨各行方と先入る人も已れりける間其始終を尋獲へては率
 小中知らば以鎮守府小降車一移ひたる然る小宗任は去ぬる十七日の夜比紛き小
 厨川を免進出天小弱と地又踏して一身と隠れとて是年驄と極め毎日務
 鷹道遙して村々郷々を巡り山登孤家と遊補一ける若るは國中れ人氏要見
 までかきて兄弟が面孤見をばはとら若るはそればかりめて見寄られ彼めて
 追えられ書と本陰小妨澄夜と迷苔の洞小外短福に肌と隠し生菓に肌を資
 十餘日孤遊一たりとも積重身と責天墜基めうねるは一身を措小所まとい

りて地國中遊出んとすれども國は國司郡司其通致塞た其所を守りて綱
張を多く懐く出たればかゝる宗任執思案一けりて我素懐と逐んず
思案は却て匹夫の事ふかしく刑獄の辱を得ん事必定せり初まて城を落
て又擣と成るに恥辱の上此恥辱を味は上の物味りや也獨り簡しては
ける道もく舎弟七郎則任は弟は弟を不之後其對面して大に喜ぶ依何
計んとてつぐふ計は則任を二門に閉じ居るに子細かく頭緒を
是も則任も一まは速隊系一十世の分置とも見や也之は只今結ぶ
かり偶々後打連申さんや之れは宗任聞くと是れをきりてや世
徒ふと事の中又時首を奪われとてそれより物借して程なく行着ぬ
懐敵の津波舟奉り門外をた刀と拔棄腰膝尻屋へ庭上は結一安
則任自旧怨を悔て降参はる作作の今やその罪責を免され一令
召使われ推す身と申二門ふ妻て傳代の奴と成る給仕進ませり

もぞかけの八幡殿増く思案と結ひし心中思ひのひんがしを
其義は一令の我家が申賜く得せん意易かれと其修二人の老と具して將軍
の津波よ出のひ増くやさほひつら依と南原に武名を推ひしりの宗任
身別但を具して北を悔罪と謝して降参はる罪出預くは科を降し令
かやと宣ひたれを將軍則任は幸いたりたれとあれ宗任は許さ
にあふ今まで多くは生捕降人其令と助を降す事も宗任一人をす
と疾引出し之斬罪せしむるやと宣ひつらと八幡殿守り刑緩く恩原
たり君仁政と許せん不元質併事出来たれば小罪に義家存する有
小敵下され推し強ふ宣ひたれを將軍許容ありて志がく
討ひ給ひそと我と宣ひつらと不より宗任不後後の令助かりて八幡殿
小せ居るる宗任令助しや宣ひし程ふりかゝると不隠は悪びるる
の一族修教日毎五五人十人打連とみ降人あせ出たり



前六ノ州

責任首登系都新羅三郎元服

康永六年正月八日安倍責任日重任藤原經清等が首領と三級を命じ於小上とせしむる
津使藤原季俊物部長頼二人を兼りけるこれ責任と付り時特小孫骨一
たり程小多の中より指出せしむる上りけるは使者は二月十六日小上君に於て見物
の貴族系白川のほとり小毛と車に載り馳せ我人より希し出せしむる事ハ難
理多かるは年未か一家盛悪とてけりたせしむる源家此を減しおひそ
十餘年経経ひぬる時呼の者うる喜小此を聞くと目小をば其類魂のやゆ
計思し記名所んや愚なる若と鬼神のぞく角を生ひ出牙とて貫しよめや小
さひかしてこれしと見おせりてそも首指せしむる若とて先ハ責任が下あり
唯て降人成る官軍中居る一極今後まみ取進役も多を不問主責任首
孤若推してぞよりけり勢と三級首共と使の應も我波一と去程小孫骨時將軍
限元國勢以果と日正月十六日奥初を打立り上吉希育の強款と殊

前六ノ冊

人殺多召具て於小孫骨より給まきぬる水兼北下向の時常陸國より多孫推守が
件小止宿志流ひ極今上洛の時上宗基が館小入給ひ三日返る一歩は月日
相控國小孫骨の鎌倉の館小入給ひ翌日權を交え道狭めてまきぬる下向の時
由比郷小地城トて給款伏誅の後必き石清水八幡宮と勧修寺なる首領とて小丹
新せり其時勝地をト一封の檄と致せり年月違ふ極ぬれども其乃ち程極一
急其地小宮廟が管一や其式意は申合給ひたり景道將軍の命と共なり極これ
松奉り一吉日良辰極極良材と求ふ慶高橋を管成し金門表表と極け日
の功とて日奉八月官廟の在者成就せり即遷宮ありてより神威日小抄ありて
揚焉とて靈相あり後世建久二年頼朝公の命より小孫骨松の
都路小孫骨の富士の高根に絶湖面早とて勢回の極も孫骨とて其表と極極入
り清養小湖に絶湖あり清養一人の翁極小とて去て日幕府奥初小大功
あり年いふ具を節義家と輔佐小孫骨とて程義家身八幡の氏親小孫骨附

神明擁護の力あり向後又我を此輔佐せしむる者今幼稚の三郎之が成り
ゆゑに託せば結不波が武勇と權持まふ我を新羅明神なりを定ふと云
て差さめおろ頼義將軍とありゆゑ幸上流の路に直小春清ありと
若子の着服とも之脱の幣帛然持ぐべしと喜ぶ幸斜り此被三郎后
こ申し去りて天喜三年結不波守と誕生あり今年九小成のふ即新羅に官居
園城寺に清のひ神人し女成りて神樂奏し催馬樂成の幣帛と持げ神意成
慰まふ今日ありと二所成とい神の氏族と神あり元服あり新羅三郎義光
せ名をのりたるこれ武勇の達人とて朝家の清元も是ありて是を武將と云ふ
頼義朝臣上流賜恩賞

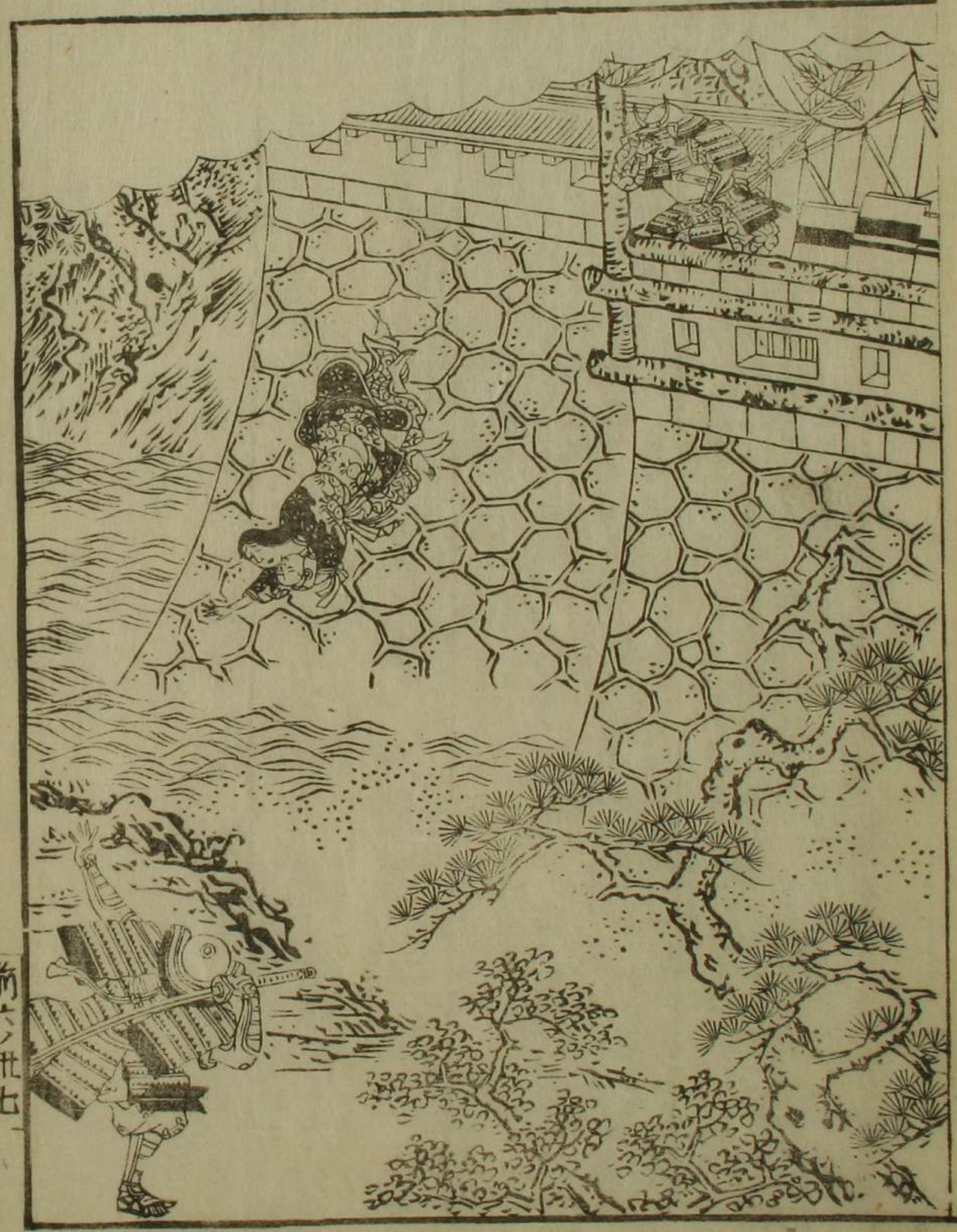
頼義の勢と率て都府ありより結不波のゆゑに見物なり清原真人武則を二家成
はして一帯二子成勢一日引下して日正日小入浴せり日正日除目と仍且勤功と云
結不波義朝居此拜して正四位下修儀守小補せり八幡を即義朝に授五位下出
羽守と賀茂次郎義綱を左衛門尉とせり武則真人一族と催一六軍と記し
て宿軍に加り其を忠功成りたる有頼義朝臣上奏ゆゑ武則と從五位下
結守府將軍と自任前軍と賜六那の押領使と成されたり又首と就すふ
使者と忠告せり藤原季俊成右馬九と物部長頼と陸奥大同と其介
源家成一族結不波の忠告代被官の成りたり其忠功の成ゆゑに勤功の初る
半願と天下此業とせり去程小補列給居源頼義奉國の因の所被小補給の授奉
の軍勢と成り清原の斗あり有る去りて加美川合戦の時丹新小よりの澧水
忽涌出しか其水と壺中小澧今奉國の勢あり其水と壺を埋め音
呂業と成り壺井中号一康平七年五月十五日有石清水の神を壺に遷し壺井

八幡宮に崇拝し其後の養小者一人抱小まき若く室小海丹所と擬し吾成る
信する幸衆小結らる吾何ぞ虚見汝汝海を幸備ふそふ親のわし汝が修養子孫
小造し武功を天下小輝きせしを死し終る社壇小入給ふと是く養養の縁別給
心肝小結し貴かりなれば湯作跡跡かりたれらる収奉神威掲号雲社（雲の内の内）
宋任奉仕八幡殿

康平七年に終るる翌年と片治暦元年とに縁別給臣頼義之次年奥羽合
戦の同五給ひし初給も悉く果して尚も安徳貞任始九箇年の同討死し
者共の教養せよと通法寺小籠く七日法華會所成り又萬年の善提瓜吊
りんまゝ斬獲所の首者片耳と取く術並給ひる小其貞元と一第五年小及りこれ
わらひく系初七東坊門仲小海小敏の傳ふ一書瓜まき耳と若先仁國を建立し
て耳納寺と号しかの亡年の教養せよし給ひる（旧都名所園舎）幸向小八幡殿
但限らる治暦元年の春又上治志のひらるを宗但傳来の給らるわらひ給ふ

罪と免して召使されわらるる中も小思ひ給ひし小頃日父の卿如の亡年れ若松瓜吊り給ふ小
時給得く頼申させ給ひるは依り東夷の亡後と憐みらる奥羽系初のあ所は耳納寺
と建南園とて七日の法會所成りて承かの亡年れ罪根と資を給ふ幸殊に有る
き沛恵し小あはばや况頭と伸く軍中に降し手と末く麾下小服せしそのいまで
園園の中に繫かき作半給小不便に存作わられ連の教養小成りて罪と若く獄舎の
若瓜も質あらんを厚大の清意進せを成るなり作と好まらる言ひなれば縁別給
わらふかと給ひ実を宣ふとく惡讎害を成合々討死せらる者の後世とせし資んじ
て親に此と改先傳降せし者共瓜聚る目本の若と救らる半吾善心の到らる所く
これそ力百約を奉向小是く一羽を奉向小是れと云やしたるひ築善世を成るも
今其身の分際とて僻事とて小あはばとて成て伴の降人式十七人悪罪と許し涉
一門の大名を人々配分して其等流流くそれく事成仕まらる依り養安徳宗但事
八幡殿の良為小成小ありわらる府若殿上人達集りて東夷左を成りく給らるいさ

貞任が一子千世童子ハ十三也
 八方と云ふ事ありて味方の
 目尻致さるる則任が妻ハ今ハ
 かくと云ひなれば則任
 死とぞ思ふや我
 身幼少のまと抱き
 二の園の上より身と投死
 矢をとりあへりる則任ハ
 命をく宗任と云は
 降参にむと云は



行く見むとぞく打連八幡殿宗任の敵小判梅を一枝持ちこれ何と問ふも
宗任よりあはれ

我國の梅の花と見ればも大官人さういつわさず

宗任

ぞ申されぬかきけくほゆいといつて八幡殿宗任と出でて始むる刀刀かと賜て
何れ宗任貞任が一族の中にあつてもゆじられたお款の言中明き首領と考へるは
といとも性ト契約お忘れも其罪責お免除して義家ご身近く召仕なれり今
ありて汝武をう給仕とてまと思ひ宛てとてさひなれ宗任畏とせお娘
義家へふろの屋小娘もや初も有なりけれ獄中はく亡きんぞるかこれのこ
娘ははるお思儀小令助とて利義家小思足見事え来をむ祈され幸来は
懐と教せん今ふあつたさう義家の程の程将さる早ゆはむるは仕接せいら
も公家うち解くまの忠義と見せし隙お窺ひ仕裸べとて一向色も出さば
他半形く給事とてけりまう八幡殿と給神小通と好ひるるおお宗任が胸

前六ノ卅八

中の知すかして中と事う我を計人思ひ我を事と服は但一且お存と存と
取くお孤懸とぞぞかふ剛の着と高なく扶助の思を思お利を賜る者あり
さて内お付侍迎へ候候一私の悪歩りも必宗任を具せられたわ或時活
兩向通ふ小承りて難法三徳ひなる時殿下作らる陸奥と名所多と願ふ年久か
小在は是其々お見んたせよ小娘は是八幡殿畏りてお説くあ
ゆふ承りし事もゆふたれお軍此最中ゆふの勝形く魁さるははりり
但宗任君國とかや申所も、其の教まくと見たりと好お面をくお教とらあん
人ふんせぬほくお見たりは其候もく打さるはは憎く嗚呼のに遊小娘をく
吹風おまおは園中とても通り勢お小娘ふん操と非
おわかやわはくおさひなれお教文のいん威下のおいんははらお我の中はかお秀
仕りたるもやと甚賞お甘れたりと小文に匡房と申せりお累代傳家の業お受當時
博覧の敵才且軍術の長くと官位昇進形く目お入連人ゆく坐し死今う日々

義家

殿ふ奉りて人々や共軍の物語らち聞かちけりはせしごときつちもく西の庇ふ
暫く休坐して義家の器量賢く良武士おれども軍此道母の志一忍らうや、獨言に
宣ひし成時節八幡殿の召具せられ、安徳宗任抱く、小作ひこを獲て陣取直の
名將とむと事と宮人か、安かぬ事此の居らうと左右と申す八幡殿出
給ふ宗任傳より腹を居わひて申す八幡殿軍のい候か宗任が申案や
かきたる事もあつんと腹わひ候ふも見ゆべ宗任志も色直直にわがさ嗚呼
此を言ふは志をぬれぬ事とて色直直に東夷の無骨人も許せし、宗任羅
むく其有と義家と作らんや最堪お移らう八幡殿大の不利、此の元賢楚忽の義中
わらひ義家がと有ありとてくさぬぐさか、治新(匡房卿)お移り車居居あさむ打
乘んじのいふと義家物居進寄て殊交會釈たの宗任と長傳する事やいとせ
真氣しく侍小向く侍たれたり候く八幡殿御殿に居り候ひく後、小匡房卿の
門客とあり常に通着く、學給ひたり候し義家物居昔も弓並此家よ生れ十四歳

の夏より遙く申す下り置夜合戦おれと馴く一向小文見るとと勝あふ、とも是
後、匡房卿の耳より其非と聞ゆ、治新と理より義家物居も徒人おとあさひは
後わくともい給ひ候し却白其人の身子中成く道孤学給ひ、一有能く訴るやう
申す、これを林葉せり其頃八幡殿の要びく通ひの所あり今日將せの末、家
垂小徳のふたれ兼く此有傳たりたれを道より家へ下り候し悲返され女車捕り
設く其表の疾才計小宗任を人小案因せり、とせり物、渡際、女車捕あけまは
候教の都と始より上より八幡殿の車此願ふ上りて、いやはやと云ひはれ、と、
其間通不隔つる小月晴く焼と態中、建空く帰ん、と、後、の頼も何とて
車の上より一羽お初上揚り飛ぶ、女と妻小見、一人の様、女とて、娘、小物志
たり、宗任と車此下よりこれをとんとそもか、早業九まの、不お、飛ぶ、徒人、
坐、口、痛く、恐れ、つ、事、度、重、つ、ま、母、圓、く、た、小、勢、た、元、為、情、か、恐、れ
事、成、立、侍、物、成、中、腹、悪、く、打、動、つ、ま、事、見、の、傍、と、滑、ひ、雲、く、云、の、事、あり

お軍頼義三井
 寺の影の誰の神
 の長を公感十
 次男と頼房と年
 と付まひ々か



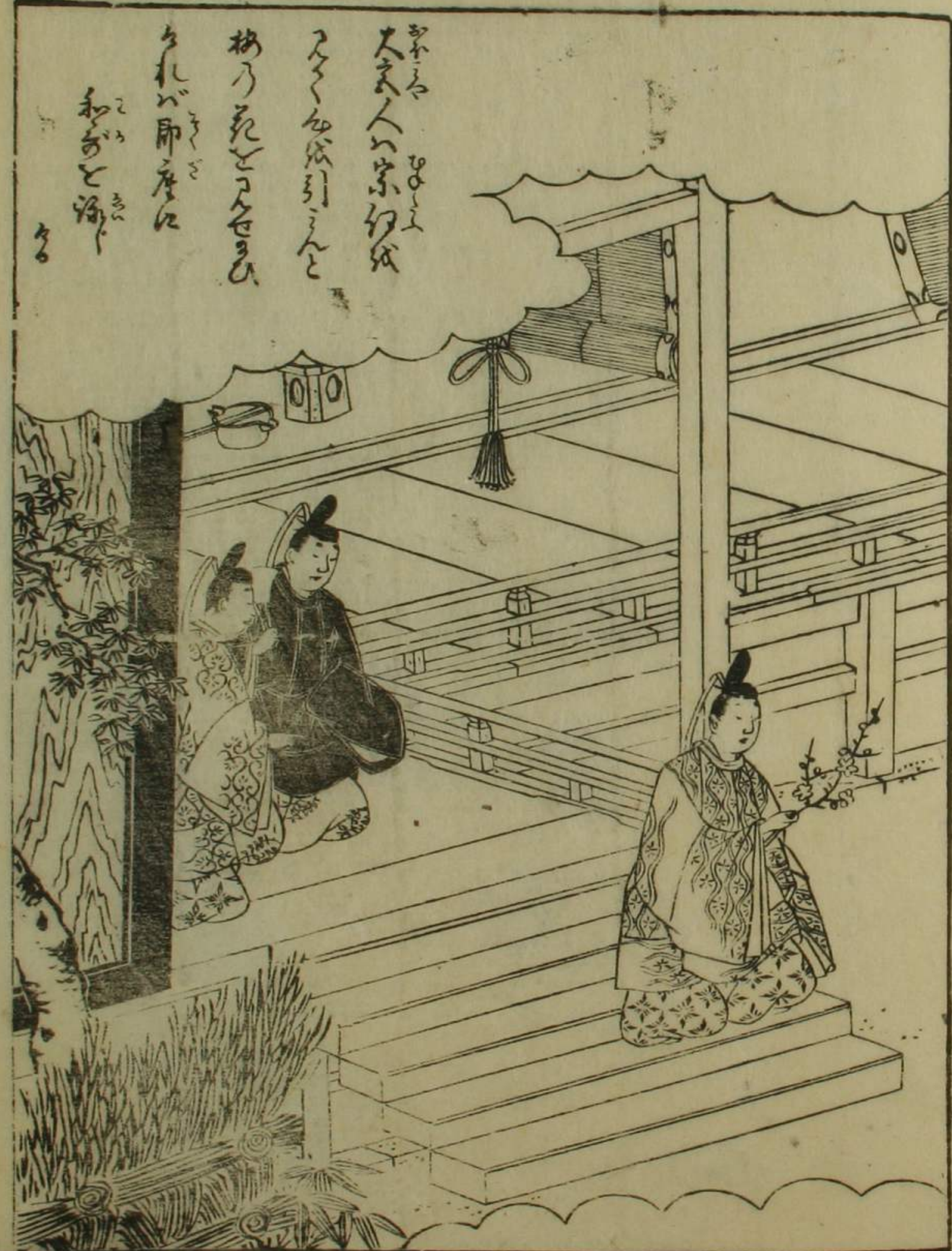
前六十四

今より悉通ざる様と計ひて給せ頼のいかに傍に容易様と伴の様敷小より頼成
上げ藤と揃へ例の様と計ひて給せ頼のいかに傍に容易様と伴の様敷小より頼成
やて其身の老刀板短く妻戸小隠し初めとて一表二夜待ひけり小其夜を通ひ給へ
ふと女と二回する所推へられぬ其れ令の消ぬを証し強親母の心を悲しく唯泣
不泣居り母をふれ人の悲び事ある事と其名を責められし女を應へて廿二夜引
被とて階ぬ八幡殿のわが頼事との妻ももろ泣けり公親の事とて打撲くは二日二日
まもせとて色せし人の恨はんもつとて又い吾懐くとも孫婿りて早く相見や
とく例の宗任公具して二夜で終て精儀敷通く成ぬかの傍には車ふめりゆりくも侍
御さうせ太刀板七つ枚棟居り八幡殿例の様と飛入給ひ一が早其形勢やう宿ひ
むむるは飛ぞとて飛入る小圍裏の盤角五十六すゆけく抜打小振りかくてへおひ
ありおの傍とて小寝られ我力小及べし人形と成れ落く逃ぬ八幡殿とては程の
我通為汗給は身傳く音く毎守雲のちも未寝ぬをあらはれ給くとてせぬとて

共小波瀬の仕立かり初め若狭梅と惘然とて坐せしを小乳母此女房とていふ
は程の向ふゆりそくや流るるおは流居りる事稍恨も晴るなり母も兄の傍に居り
恐しく先宗任居る事へ人知れしと誰か先宗とて其を問ひてりなれど
宗任思ひなる早事流るる上も名宗とて臆へたり又極くゆきとて幸ももあ
らぬ心一定とてさうなれど人傳は得て事申ゆり直申入居りてさうかの徳と打
はさし弓服様と桐梯負わたり母屋の貴子小之膝と主の事いひて眼と賑くさ
たりたりと其骨柄誠も愛かくぞ見ゆける母打あそく和夜に作を同進なれど宗任は
上り名宗も安られども我名を宗任の事と名宗もか宗時節小違くとて名宗も
名を用えせし但し強く固く我も主君の良木とて若かりや書後なる大も
多くと入居り給くぞ申ける一社の紫色瓜共ひわされく物もさうりたりと八幡殿の
宗任が同音故用くとて様と下給ひ母屋の底におのり宗任見進くとてさう
坐する事は有難きとてさう好く膝折くたり主とていふ宗任とていふ相方とて感ふ

結く従五位下に叙し鎮守府將軍小補せられ眞任が跡と押領して奥六郡の主と
成り威奥羽一切を治むるに及ばぬを洞見其子荒川を即武貞父と送給相續し
結孫眞衡眞人代々至り威勢又父祖不替る物とて併事と行は國室と重し
朝威と亦以依之場の内務ありて兵必送小納まり物も眞衡嗣子賜るれば
海道小を即成衡とて老と若とを以てさうとせりいそと妻おなれ常陸國位人
氣權守宗基が女源將軍に生るるあり今年は子と違はく成衡小補あり
らふ出羽國よ去る秀武と故將軍武則が甥とて聲も聲もなれ兵あり
去ぬる康平は合戦も二陣の陣頭と威教度の高きなり威を堪へいふ今年
も老く而も眞衡が威強して秀武も家人の内小補なれりさぬの事ある中に
の盤小金、鬼く獲て自これを持て上歩出雨打小流てかの盤高き小補げく居
たり多し持言直衡の五束の君とてるを良法師と圓基と打ち居たりい
おんく若くこれとてさうとせられ精之一や時も梅り多し秀武の老の力竭て腕

も慶長六年に成収の中小里のころは信さ事なれり因果報の勝劣ありて
この年の奉勅とありて我中一一家とて年老う髪と梅り南と吐は右乃
通る眞衡派小道成とては疾ゆく速なり新とて腰膝公屋免身と若く
庭上小補さうとて之をいふ事半の情かき其身小補く我を悔ふい安かぬ
所おくは上の何せん思ひまわさく持する金瓜庭上小補らじ門外小走出教多
早てる飯酒をか下初す小賜く唐櫃門の赤に葉並遣一編して馬引系打家
良等在物具さきと幸國中を隔る眞衡と圓基と果と斯と聞ふひ小想の
正るに者の所おく家初とて対面せんとてされり我愛もさういふ
かし誤ありとも幸眞衡小補してか家奉勅とて奇懐なれ依り秀武思ひま
半ありて眞衡小補辱せるとんどの斗ひあはし得るを其信圖まふれて兵瓜催し
秀武を以てしてさうして法方小相智なり眞衡軍勢と備はし聞へかば六郡忠
臣とて小なれ徳氏の即若恩顧の事云處のやく小集りて日本徳あり六郡



上坂下中をへしはれ財と山野小侍運び光弱の東西小運達ハ駿河の事す斗はし
清衛家衛與秀武同意

幼少秀武と出羽小侍道すかと思ふに於ては真衛日次極きたりて種を大起しこれ
件千の大勢なり我々軍勢違ふ方と成破きん事程違ふと一奥の清衛家衛の
真衛と恨を合むるなりかきと憂むると思ひて消息を委すて先二人を伴へ使
と定りたるは清衛家衛とて其異種同母れ兄弟なり清衛が父と曰理権美
藤原経清の御子と安儀貞信の子とて付れり其時清衛の母が懐中の子とて清
將軍武初の母と違ふ事や清衛も我子とて書有き事なり其後の母が
腹中二人の子を生きて居ると武衛とて家衛中よりされ二人ともは父と違ひ
分る奥別小侍なるなりみか真衛が親とて一族たりとてども何れも徒老の
成る長たる常小真衛と恨る也秀武頼る幾たりは使老の御子とて二人
其文と扱ひて小真衛小かく徒老の御子と振あつて足下達安らば是れ何やと

外の半出ましく好むと奮く己小我許を承りたり其治小足下達入替りか其妻よとて
家次焼掃は真衛と漸傾くともやは時を天道の平治の時より真衛夫妻はこれ
後宅と焼掃はぬと聞かぬ雲れ其真衛を得らん事ある事小あはれと事なり清
衛家衛と小恨び日來かか宿有し事れ早暎の遠恨と教むる事なり其あり
くはるる時を待て来りぬと頼り清衛の家衛同意して真衛と成破きん事要
瓜ぞはるる真衛のかか企ありとて憂むる事なり疾出羽小向く秀武が首を
んや一逢ふ思ひまゝと軍は伴し秀武が伴し推参り清衛の家衛は真衛打
ぬとばく即勢と起し真衛が敵に襲ひ途ゆく推次那白鳥村の在家四百餘
軒一宮に於ては焼掃は真衛の己小出羽國小打入んとせし事なり其御子と若
あつたれは己小御子とてまゝの出羽國を圍く事所の敵と防ぐべしとて途
取返し搦手搦ぎせ馳居る去程清衛家衛が兵に真衛が敵に推参り
く中を圍んと岡瓜せ上りたる真衛が猶子小を即成衛の相勞ふ事ありて

病本小州より討言防をた兵ありりたれども何事れ起つる所ぞと上坂下で周
車駿と聲とほくは母ふ新田方は國とめて國と守り高き兵よしかねと
勢の如しとてさうりたれ左かくお入んもせび老南する所小真衛大勢ふて
取返ぬと聞はれいやくは勢小高家ぶびとくいまも我さるる小軍と引
てぞ返さる真衛と前後の戦を仕得ざりて候ゆやくはくは上車と大勢と伴
我軍所より國とせ又秀武成し取登りてさく兵は果先置まざる年疾と目小能
と營とけ架

義家將軍奥州下向

左馬頭義家初居い永保二年六月陸奥守兼奥守府將軍小補口行近目下向
あはして兵出させれり嫡子左兵衛尉義家十八歳ゆく去年の杜早せし
弟小次男兵部丞義親十七歳三郎義國十六歳四郎義忠十四歳生成長るる者
相具りしひらり將軍義家領守府小老の清家此家私の宿老を瓜敷せんて

國と勤し一民を若し其罪責をさふあは清衛家徳と其の枝葉ゆして其年を
真衛秀武あつせりは清衛と名返り秀武成り及秀と左右の程非とれし
若遠宵ふ及び罪科小所せしはべりてさく委細ゆさ令て使者と出羽小せし
去程小出羽ゆふ真衛若平は勢とさく秀武が柵を打圍晝夜を分れ我あり
かつる所小奥州國司義家初居の使若たうさく西陣小ありたれい寄りも城
中も軍孤止く其右孤承る使若國司の令と違て云頃幸國中接澄ありて万
民手足と安する所小根母千戈と勤し檀小國用と費し私の小義とさく國の大
煩と扱し乘其滑何幸ぞや急軍と止免陣を拂く俱小國府よあられ居りて
那小後さく里を過れまを所くあは右遠宵の幸よあそい官兵孤りつて速小殊成を
遂へ疾國府ふ番向せ居べりてぞ申さる真衛秀武も誓懐いさく國とてさくも
櫻小國司の令と重し表ぬし頃幸し真衛頼く城中に軍使をさく國司は居小後
て志づく軍孤止め國府ふ番し惟勝負と後日の合戦を期まへてさく申を

る秀武子細や及び佐師のる不意にて秀武も赤白と企仕の陣と引く
此と我と正善しける初し初不其日の流系に真衡四方此圖を解く國府小抄と
名に真衡若踏込侍ひく不意の事とむむとかく秀武も心を賊く陣と固
打せり真衡も後其秀武あり其共清衡家衡あねと若出向んむる半りやと
て前後小をとるく遠見瓜出し一向けの伴もせり互小途中マ支めりく
國府小来者しわりのる

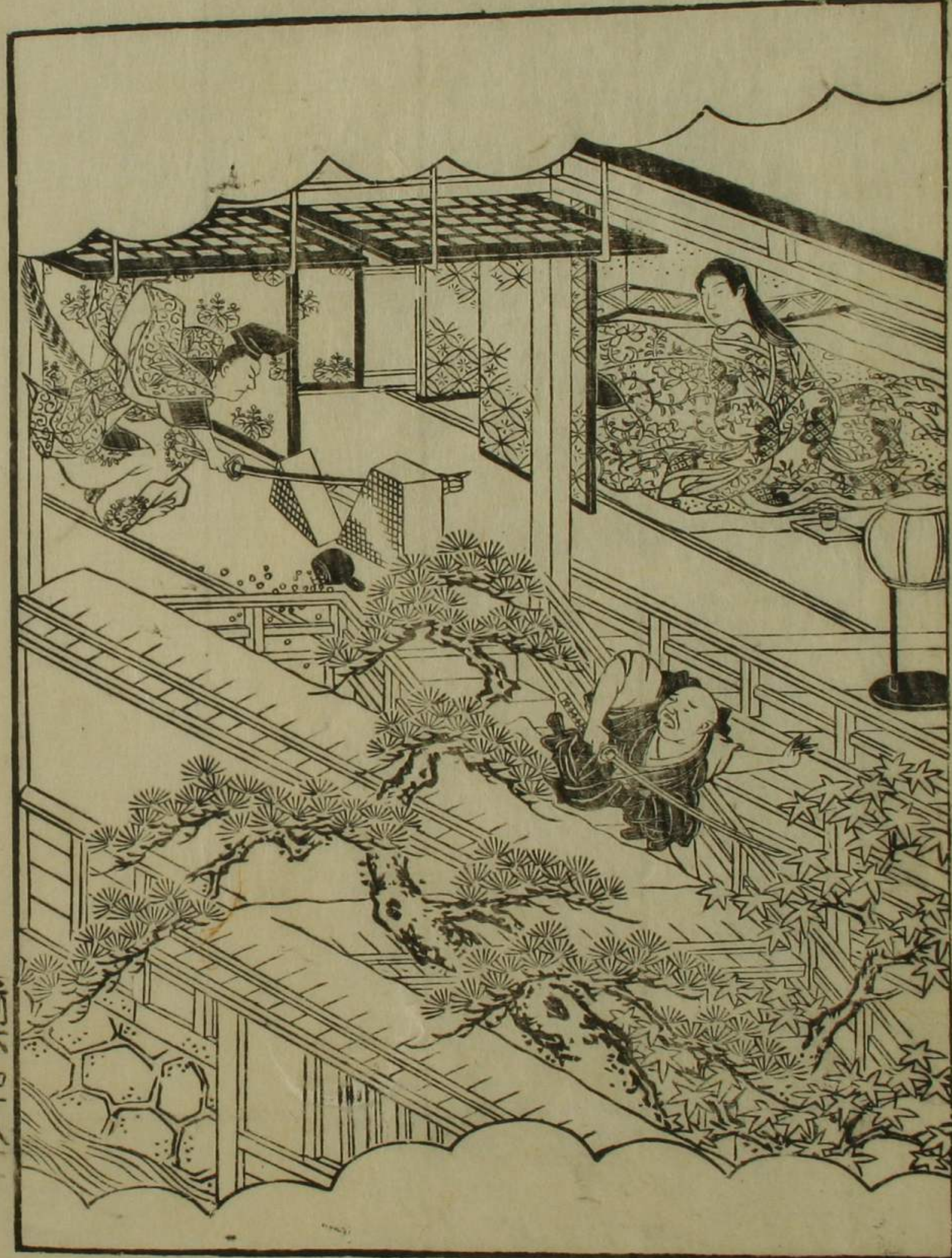
真衡與秀武和睦

新く義家初居く小向く旁へ私の宿意は之のく攻守と半とけり半雙方
狂非不非り上朝憲と怪げ下國民を苦しむこれを元々双方不罪料はじ
就中義家赤國を任不きや再び下向しは其面へ回と好あそとめり半小
對面して者の物落はしと慰もや喜ひ思死しに思ひざる外小抄此と結びて
こそ情のほたといふ半此眼あつとも義家不帰して半を返りて結と結

戦を起し結り力かく義家款と成奏圖とけり官符を賜り殊哉と加ふる
たわ片小難くは若初款の名とけり先祖の忠勤と然し結んて最は情か
せ空へなれも真衡も秀武も涙を流し首離と定志半首九進しんて
清家の孝家と起し威を頼も半これ全く故將軍入道殿の恩沢も依る何そ
一約れ念どのりく此日の原恩は忘れ二軍此帥と起して南討の願今と背ん
やそく真衡秀武忽和睦したりは上りて清衡家衡と居る不家衡とあや
思ひたるまに清衡は素より異儀はなれはあやぬ武衡は相芳不半ありて今だの
合戦もも出合はるなれも家衡は同意して將軍と傾んやお企る由奥府支國
は一半瓜のく云言てはる

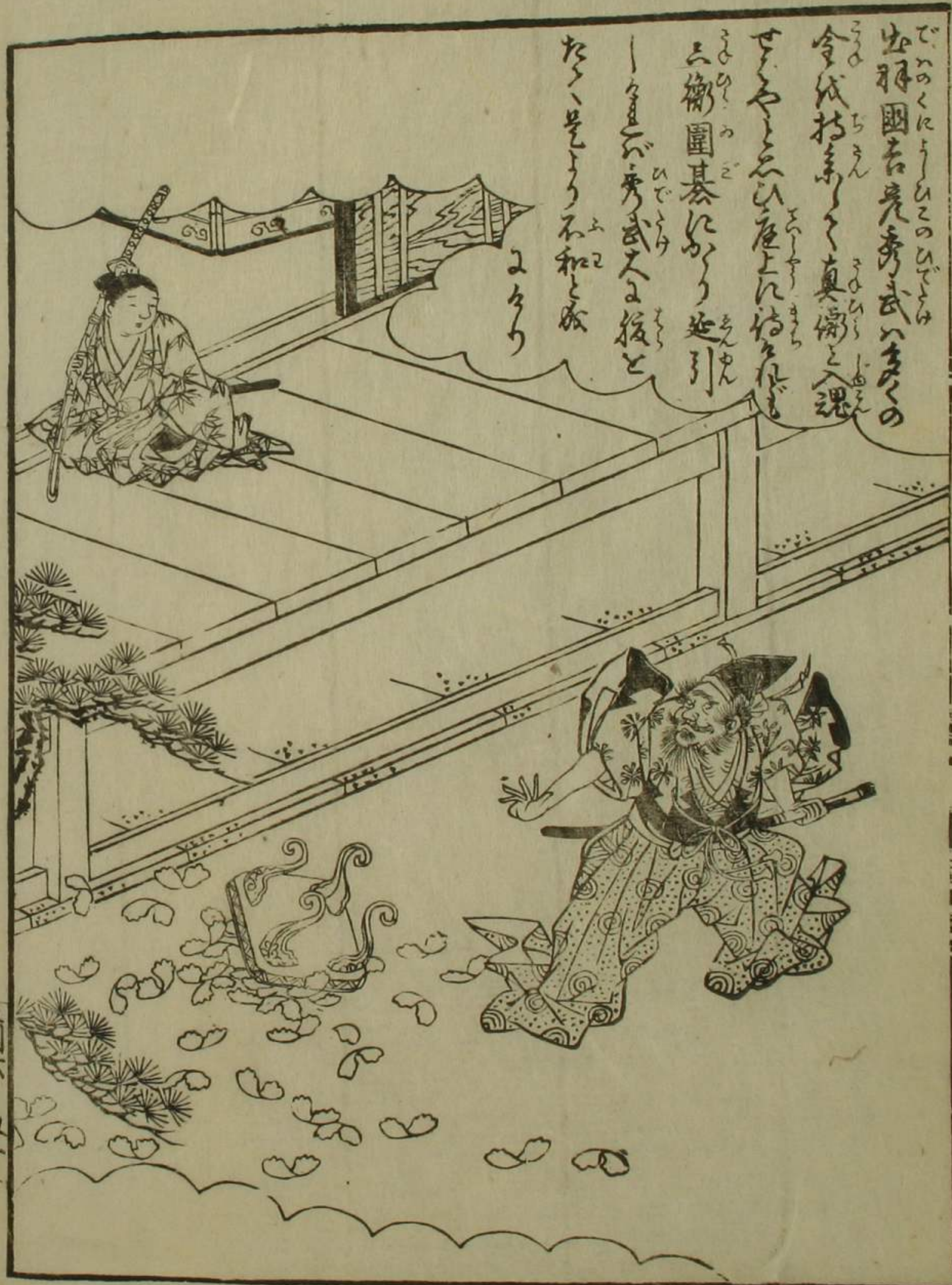
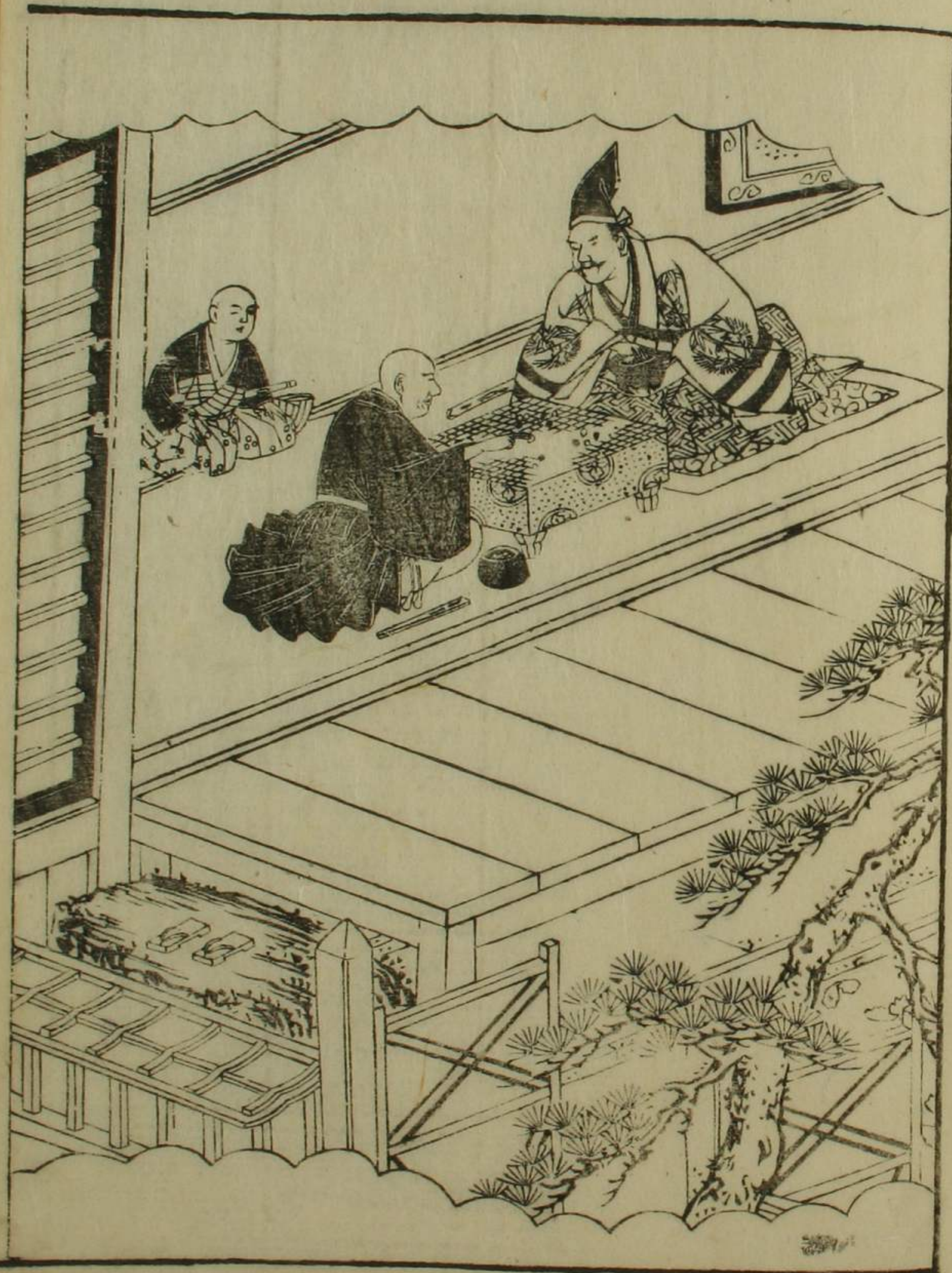
義家將軍攻金澤景正驍勇

然の家衡と殊哉とてや七月三日將軍北師北金沢柵を引きて十重柵
重打圍んて周を上げなれは城中鼓を鳴しは音小岡谷合は西陣小ゆる声山



壑小冨波く高天も傾き大地も裂やや夥し 其中に物小ゆじを足し相模の國
佐人孫倉権頭景成が子権五郎景正なる生年推六歳と傳へ力量馬上弓
お物受るに達者ゆき心飽まて剛ゆして其質素和の若者へ毎度大軍の先成
蒐斃勇めして善戦敵を斬る落を半其真を志すは二所の子成百
比較弱く奉勅する程不防軍これ成感美世にわが若かり爰も武場が軍勢も統
一が其二と憑し兵小奥州の佐人高海跡三郎とて若あり強弓は子成は弓
一々景正が働と足し公勝冠者なるる然も年も満れしつかず所
為事れ若小あはれかれを闘へ多くの味方と失ん射捕をやその景正が進み每小
橋の上小有がが揺る心と痺とされし猶も同も昭るるが今日跡三郎は軍
狐具して柵外お打ちゆりし小景正が叙父孫倉権を父景道が陣中蒐斃あへせ
追つて一つ残る景正も陣中あつて例の如く叔父の敵成受て四角八面小とて
あつて敵成四方小追懸け侍小引退れを刀推拭ひ室小絶め即ち未だ持せざる丸本の

弓と云く弦響濕し寸引して又詠小向うをたれおなしく居るを成跡三郎是とて
あつて究竟の處されし追つてかけあきく四人張小十束絶まで引放し弦音高くゆき
放し其糸矢所とそがけ景成が右の眼と射し首成貫き甲の疥付れ板射付け
たり善調の若かりせばは矢成受てけ付も命生くも見たりは景成はも弱に
け付目ゆく敵成見る勢唯今津矢賜し鳥海跡三郎敵とそを是れ其矢を引かす
善の矢と進せん受て見たりしつ小侍小眼小矢を打ち射る馬矢と番く引懸か
弥三郎大お驚き今もて某が辨小か若者の物とる例を覺はれ人小あはれと
身の毛と豎く思をきし善の矢小中りかは我命活る由ありとて進するなり
景正念く賦し敵のがれまて何れも重く小引懸る礼抗違本に擬られかかすけ方
大事や遠足ゆして進けども重く小引懸る礼抗違本に擬られかかすけ方
や蒐めざるいふをて柵の内へ入らんとを斗りられしこれや運の究なるなり即ち未共も
落合は然も方角成と矢とつれくも志は進達し景正通小進付く意と多小



出羽國若菜秀武のひまの
 全成持素く真偽と入魂
 せむと名ひ屋上は信を
 三衛圍基にかり延引
 一々い秀武又は後と
 たく、是より不和と成
 二々り

丁也射る過る海が押付の逆わうる(射貫く千旦の板より)撥五六寸射しこれバ
おも悔馬より厚破を我落おらる景正が即お走まきく首に捲く景正を
矢射禦く敵矢射し本陣引退れ馬より下甲尻に景正を負りて矢
抜く給て仰るお外より同國人の浦平を即為次いで抜て進せんさう弓に
景正が額を抑へけりちり力こまきく抜んとけえ本陣を強り此精兵が射法を
たる矢射るの固く容易抜て為次頼貫が射る景正が額に捲く左ののしを
抜んとけり時景正附るま刀が抜く為次頼貫捕く拳さめお突んとけり
次撃たれお外おと射と志落し景正が云様弓矢中ておまらる勇士の争ひ
争うはかきく足中く頼貫踏く米あるまきくこそ本陣和敵は敵は敵は景正を
めくおんとけり為次頼貫責られお外おまきくし米取し即腰尻に顔をおこ
其まを抜てらる三浦藤念と米本足身よりも膝かたりけりお外おまきく
わけておと討ひらる景正が加給の痛子負ぬまきくおま心遠くして假もまき

札を悪く刺し替るるせやちう今小至るまで意なきまきく世小林集せしゆりの
まきくせよまきく景正がやれ者と同はこれをおまきく未考者の意なきまきく
見聞する人毎小語せし感しり

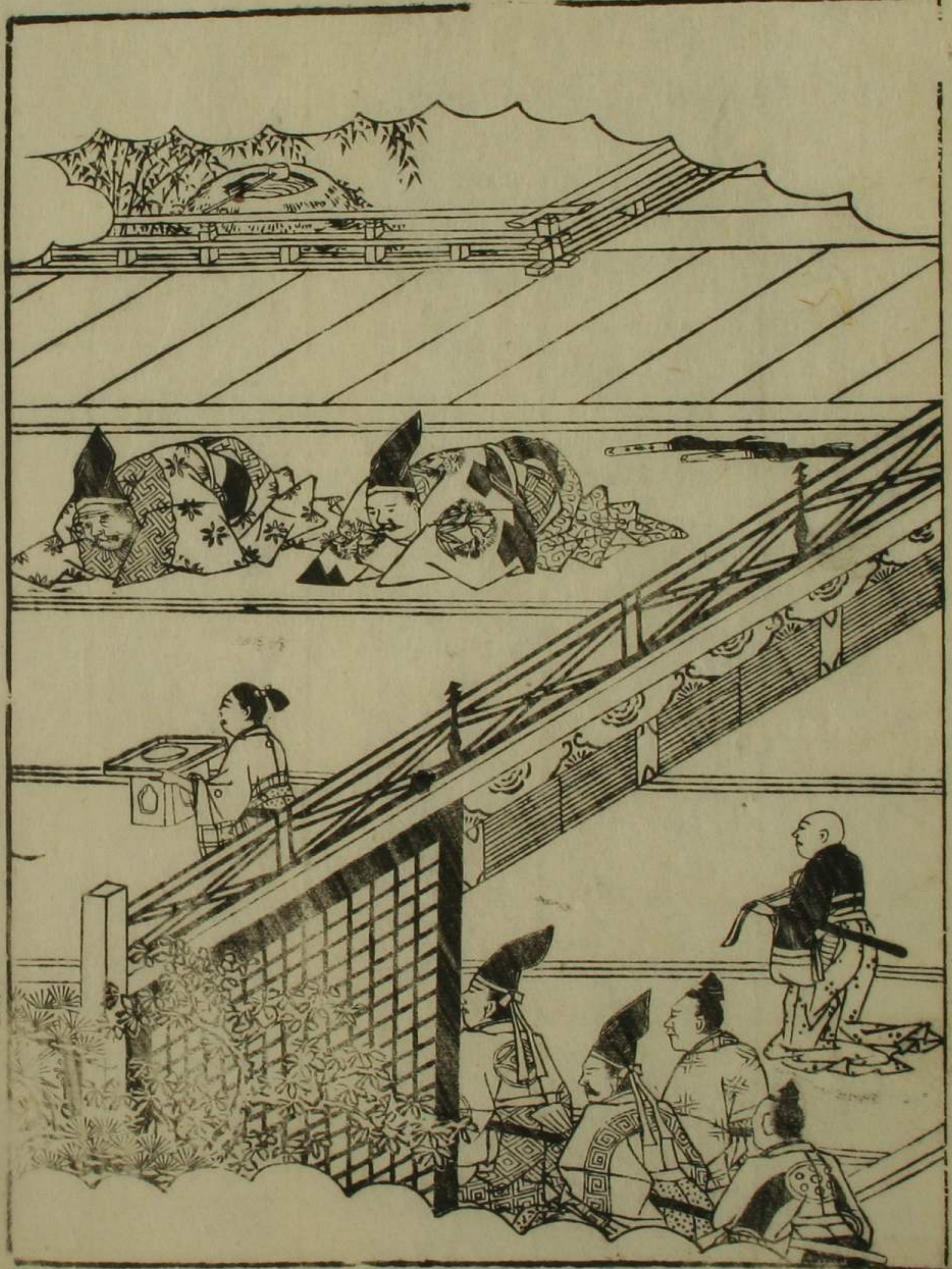
義光朝臣授秘曲於時秋

將軍の清会才頼羅三郎義光帝小之内の宿衛懈る勅召ひて遠く奥宮の務勤
孤聞即奏回をせられ勅免給るまきく義光いへて遠かひて寛治四年二月下旬今疾
疾を不病申して給るお外おまきくお外おまきく奥羽の雲よ迷ひはくまきくおまきく
治日の罪を任地給るまきくお外おまきくお外おまきくお外おまきくお外おまきく
三人お下り二十人お下りしお外おまきくお外おまきくお外おまきくお外おまきく
是れ是れ奉幣を給るお外おまきくお外おまきくお外おまきくお外おまきく
院前の御給あつて罷せしお外おまきくお外おまきくお外おまきくお外おまきく
中なる今疾清敏小奉り作をまきくお外おまきくお外おまきくお外おまきく

思ふらるあやせ推し時秋も侍供し侍らぬと跡目小付て退去まゝ世作や十光
む義光陣のい再三止先治ひたれども曾く聞令と力かくせ奥せしなる抑時秋かく
まて義光御はふ志願しる半いりけるゆゑも時秋が父も時えとて復られ
望の上手たりたりと御傳の秘曲も大食調入調曲とて二曲ありまゝ神曲の巧
成せる妙術とて時えこれと吹奏小乙女も雲の通信とて言書風とて小舞し先
真小有難と妙曲たりて其小寂滅の御將小奉と時え身罷り侍らんとせし時
秋といふと幼かりけし授る幸秋さあはるるも義光御はし藝小長し終ひ恰時え
もも劣らぬふくおら勢し程小幸は二曲を傳せむ其身とやと成り時秋成
長して後父の業と繼ぐ名流とせしども相承の秘曲と傳ふる事と悲しく常小
義光御は小遊のく他事もたたく世奉訪るるまを今度奥只小下り終ひの君や
長別にも成らんかと其終彼も惜く思はば秘曲を受受ふにて是形かた歎らひ
たれをさくれ道流も厭はれ奥小下りて時もあはれ傳受をせし思ひ別れ相奥世

中かや去程不日殺と経く足柄山小到りね時秋とかるるを向う在面も出さば義光
御ははくかかれむ中流来し終小半奉事にたれく世も膝く形向ひ今又か
長遠の憂を御慰る幸徒也あはれ如の二曲伝ふる事と歎てせ終りたるあはれと
いふ述形中も出ば義光も見せぬと世傳志願なれかこ小相奥したるさそ
劇の同形と心融れ侍りつる般おんや只其の志願違くせ奥まで相奥せんも便はば
こふて傳之都小返りて幸志の願もさくさく時秋を迫り侍奉の胸中の
義光妻く初らぬ隠ぬるも明し後序あはれ言書なりし思ひのさく先せ白
地中色も出給ぬと世傳痛しとれと室ひなれを時秋と嬉し氣か打和し侍初
まて其も其家小生れ不幸ゆとて父も後世相承の秘曲と傳へん思てても
傳あり頼は二曲を評給れりや幸奉數書し侍らぬ殊や子思のまの曾子比
再傳より知らるやかや君と降し幸進と世作らりあはば二曲をさふ事かたは
今度奥中も君の物小むるん今幸の厭申書とて最切なる有給るん義光

奥羽真衡と
 秀武せ不和
 方々一と
 將軍八幡石の
 畑を逐ふ
 和睦一
 忠勅と
 勅三々



打傾く心中方おそく足成信は六新と申あつて今へおどろき居てさして大食
洞入洞曲の二曲は徳久朝又時をう自筆に生信と取物く時扶我附與し給ひ
る時杖と幸本れ所を一時不足と疑しと更お給へる者あり即其表は二柄の
止宿を宿ひく証書の空に龍月小の妙曲を快すこと給ひは六公耳も後肝膽
再録して最有利かりき時扶我を落して聞居る高太幸九通表に授あつて
夜已お給へる時杖とこれより上段にこゝ暇を我給ふる時杖聞もあはる
思ひ夢にや唯何事までも今限おせ思ひ侍れ侍るは清弁ひくと洞を流し中
けり義光重く室いりる志法は流境し中を侍れ去給へるけれお具して奥本
て死を共小お給へる身の為義のおあは清幸と父の耐えは二曲といふお傳へる
幸は道を失ぎ給へるなり我今奥本下り方お給へるをいふあはは死せは
は曲と失く給へるやを甚思ひし不幸法半分の源切たるお給へる侍るは給へる
清幸も同じ死せはは曲承く断るんこれ七父の年中お給へるも違ひ義光が志も徒に

二并成べれば道学んとて下りて申せば公の清徳も有る侍る侍る
せはをいしや言はるして室人なれ時杖も理小考られ力及び流し給へる東お小
別とあり新く家傳し侍りて後義通弥盛めて其妙法を傳へるをまれば字法花
僕射もは時杖を降して秘曲は傳給ひしや

義家朝臣觀雁行和伏兵

日救揚つて二月廿九日義光朝臣與及の團府小者流のたれを義家朝臣の敵と
押へ清徳を給へるは後難も恐し侍りて其身お代へる義家朝臣の遺り
の下の流石の行言小をいふまにやあは侍る今日足下此奉りて給へる侍りて
道成の魁と也くまるとして是れ和君副將軍を成給へる侍りて侍りて侍りて
幸堂小在りて悦勇給へる幸堂と若おし金沢の穢徒いふ侍りて侍りて侍りて
権へ軍勢日小馳加りて雲霞の如く小充満せりて侍りて侍りて侍りて侍りて
ん又信濃飛驒小攻へ北陸道をや靡ん或る都小攻上んを企て給へる侍りて侍りて侍りて侍りて

義兵將軍清慎は跡跡く威く又兵を整理征伐せむんをわがばと去夏に軍形く軍
之に林小至りて款を攻むし其要意忘し去去年去々年源氏勝利あり
率素より軍糧乏小ありて去々る外洋陣意ひなりて國中社去民深これ瓜
款に今年之貢米多し他出して將軍を救ひ進せんを賊女嬰児の心母も受天小辨
後して農忙時と遠くせむとて耕作せりこれ此周の代小我を田小雨と遠み
我れ小及に中と先あり我を後せし旧制も新制もなれば民の深切天之感も虫
々々雨の急風早此候とて七月下旬に播種して租税恰も百倍せり將軍斜可成
喜給ひ難く進後せしべしとて同年九月上旬に兵の勢と平く國府と亦
之を以て武衛家衡斯や聞く即徒相集り軍糧區々之家濁甲たる去々年國
府を責し討味方不覚の敗北せし率偏小義忠く伏兵を構ふる小あり然る小今巨
商家の勢をゆる滅中おれと我れ一人も兵を出さざれば今夏の糧味方も
兵に仗りて大に軍最中なりし討敵の陣より縦横無盡に蒐るる程のば

款軍忽擾れとて其討四方の関より驛馬に遣兵と出し十方の播くろ夫石雨を
おろく小致く不意小勝負を交むとて今去々商家の兵を出さる小徹く款も伏
兵思ひあましゆき一率に勝利を得ん事字とされぬ一面より申され武衛
と始先満座の案とけけ去れし日とてとて要意申しとて究竟の即去々十餘
人此法方の賊徒二百餘人を相交りての救法森の下か一の岩根の下の兵を隔
置弓矢抱き甲冑抱きて撃つと遠く待てりは月十六日將軍義家將兵の陣全
陣小着ぬ日辰の一天法方れし人せせや定られり各軍と合ら陣と備し將軍義家
これと下部はひる討何のふも如く仰ぐ四方と見給ひる小折しも林乃末とて
小ける馬金の救を連つとてつけるが陣忽小破して十方に飛散り將軍遠小是
とんく怪と驚き馬と抱く宮ひるの兵形も伏付右雁行を破るやとりの今われ言
雲の回を渡りたる一河の斜雁忽行をれり一定は野小兵と我れは四方とてり
披とて一や宣ひられ早雄の若者も我もく中馳向く為求られ六陽とて賊徒



足下ト云々思ひて先母と述べて源氏の兵奥ゆくと軍師小倉とてかろこふ
子退之退修村は相小十修修で村名なり其外の老若と若死と被りて遠く城まで
逃入る其後義家將軍へ小倉と云ひける言武と云ふけりゆゆ河内文道派まひり
けれ今伏兵とぞく欲の謀中隔る事更中武の徳小倉に其板の九十年の戮の後を以て
小倉と軍の物語にけり河内師房卿義家と武の道に志をよと云ひけるふより
かの頼朝遊ひて屢傳さすべし我文道派はけりて今武備はあふ取られまふとぞ
宣ひける二種を同する者每中感失せぬいねりらる

金澤柵没落武衛家衛被誅

新く金澤柵を教日攻め其上城中中兵根盡らる敵攻むる始小倉のへと十月
十四日の夜まじり小城中之深きをけりる猛火源兵小嶽に焼く一と要渡春一りは
金澤柵一炬の下に焦去せ成り煙ふ迷ふ男女泣哭其苦を想想想天共い
やすとんや懐く源氏の兵刃は難伏打切り相小倉悉く付捕るあける是女共

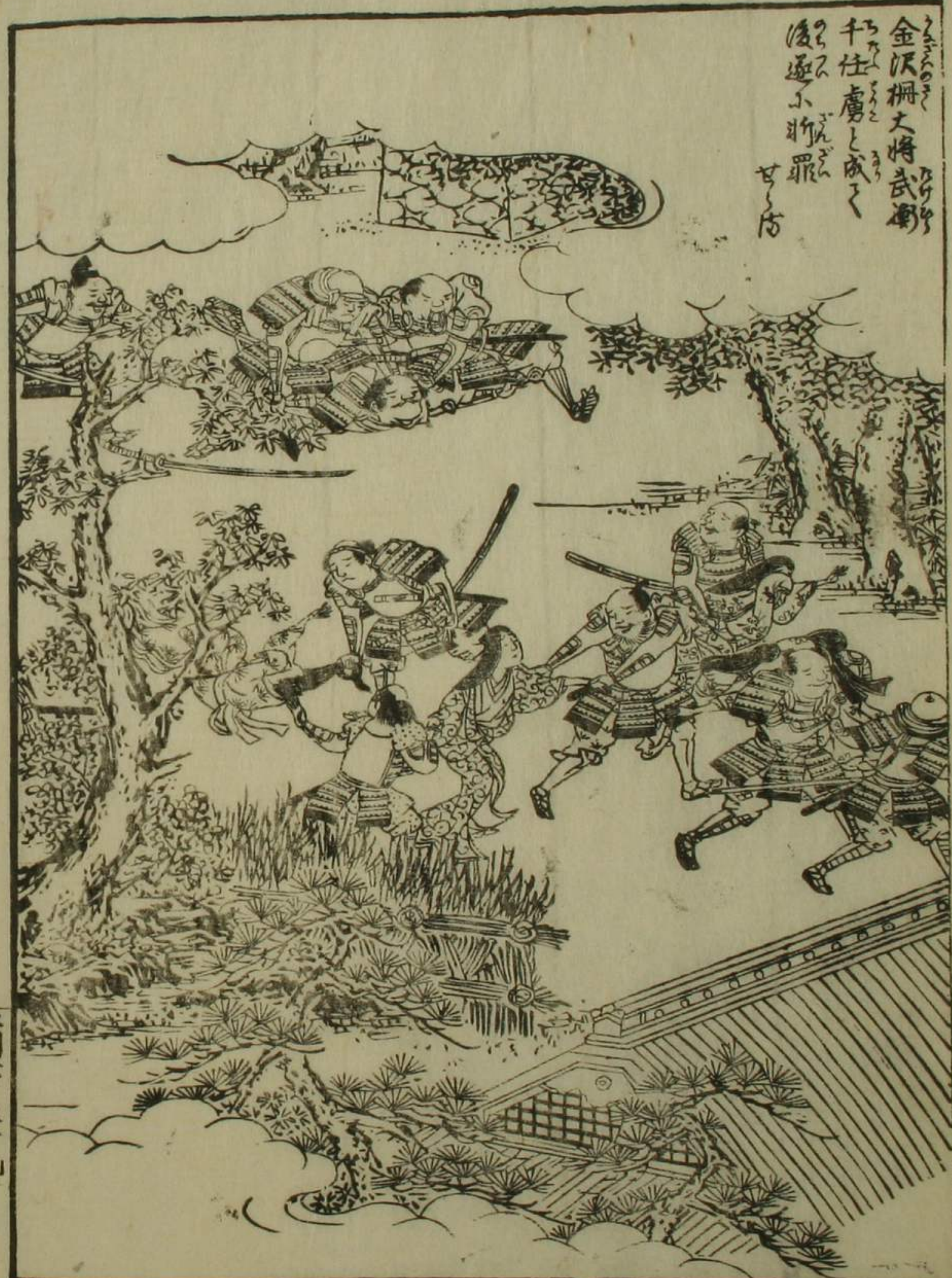
法軍これを平いてして巴陣に引よめ其の首を殊小されて先小倉の洞中閉じ
跡らり無懸やとも思ひたり然る小武衛と述る道と失く若や中々助か
か城中の池のわけを潜り身と沈め草引捕ひ兵と隔一息ともせりあてこれ
ども天珠免れぬ源氏の難兵と見付け何者形は怪やとと各源兵死没
兼引退けこれを平らふ其終始はこれ頼朝捕てなり孫原千任も主の向後見
米相一とて落も平らふ城中に連たる孤難人京に足出されほど頼捕れり
共小義家の御軍引く出され罪状責む武衛千任赤首と刻られたる家衛の不思
孫中柵を免出奇れ善甚きとすこや落りて縣の陣の平に通うけは時
次任見候免四五人殺せ居合たり武衛今いそとせんと善甚脱く追付者を機
と取て投退投倒し其太刀と奪取て指かして死しむる三ねをとせ曲者よ
や次任馬より飛下り太刀合と無手を紐上をまと捕りけるは次任力や勝るらん
遂小武衛と取く押へて首に捲くがり次任終く其面と見ると疑も形と武衛と

をねむ直の將軍の見業に公なる家衛が着公打守と喜の心骨不備とを自らわの
衣取ゆく次件不被け金波論の發する駿馬二匹引まざる其外武衛家衛が宗徒、名
紙わらうたる賊徒四十八人悉く誅せられ陣の志に竹緒波一々悉く奥羽の同
代中真衡存記一威儀も討たの後に奥六那清衡其押領使と成る國の幸公執り家
親承昌とて子孫其業承継せり義家上洛ありて同年の夏除目ありて義光右衛門尉並
中成ありて同年奥羽下の時中、勅免ありたる不階中下り給ひ、か此の沖並と
世の大事を恐れ給ひたるが思ひの外中、刺官任轉任し給ひたる次郎義親も左馬
允中成りて同年北の對馬守を補せられ、別任國小郡となり三郎義國も兵庫助
せりり四郎義忠と右兵衛尉とせ成給ひたる

義家朝臣逝去義親流刑

長治二年の夏れ末より和奥羽義家召病床に付遂に八月十八日の暮方に京
都の鉾中へ逝去し給ひ清承六十八とを同へ、即河内壺井の南通法寺の山

中に義忠とあり奥羽存生の中家督相續の幸嫡男義宗と先年早世し給ひ次男義
親相承志給へ給へし思ひはるす父の奥羽也何思ひ給ひえ次男三男と闘く四男義忠
不徳り宮へ召され其間育ちり幸承り義忠朝家の清承も依り異ありて官位昇進
も洋寄りた馬助も復せられ兄弟中母も一際つとどを兄の次男義親と其相承交は
て悉く忠義と教へ家督相續せんとして忍重と云ひをく其間と義なり、和二年の
去邊に夷濃尾張惣として坂東の國より是こそ對馬守義親が軍勢權臣の通文之
とて教十通天降下給ひたり法卿會後ありて義親孤出雲國に死流せし、後又流刑の國に
ても渡堂松の川苑園と騷しなれば天仁元年因幡守平正盛教方の軍勢と率一
出雲國の流人並對馬守源義親孫小郎木四と首と斬りて京都に登り其外の賊
徒山賊海賊原の乃方志をば落し給ひ或は一旦進志は進も後日松思ふ武士と配と
捨罪と附して降人も出ひたり信こそ義宗一討し服し國中須申小夷とぬれば
正盛一執し強敵を誅戮し教方の降人を引率して喜比の肩と處と給し歸



金沢柵大将武衛
 千住麿と成る
 後述不折罪
 廿五

上りける法皇响濟感涙かみ今度の勸賞も作勢國公ぞ賜りたる

甲賀山合戦

先年義親配流の時都小猿一途子息教養せりは中四男六歳小成
修ひたるやうと襤褸の中より祖父義家物語の事とて信濃小津膝と
冊と修ひたり遂に九歳に元服せし分給し父の名を思ひて陸奥四郎
名宗とせ給ひたりと密智相續の事い兼く津設のやうな馬助義忠
修ひの事とて子もわたりは子もわたり思ひ成給し祖父の命を
為義を義忠と養ひて家孤傳へ雅魚とせかき契約志修ひたり
義光の所為とて義忠撰記修へ陸奥四郎為義今年十四歳に成り父の
院濟所へ預け其様は場所重寶流傳の太刀お種を疑し所も修へ
父の歌とて種孤討んとし先年津波津波を義光奪ひ麻呂之所小
其場小取落しありし事義忠とていし難くは義忠虚名と被りし領内
前六六

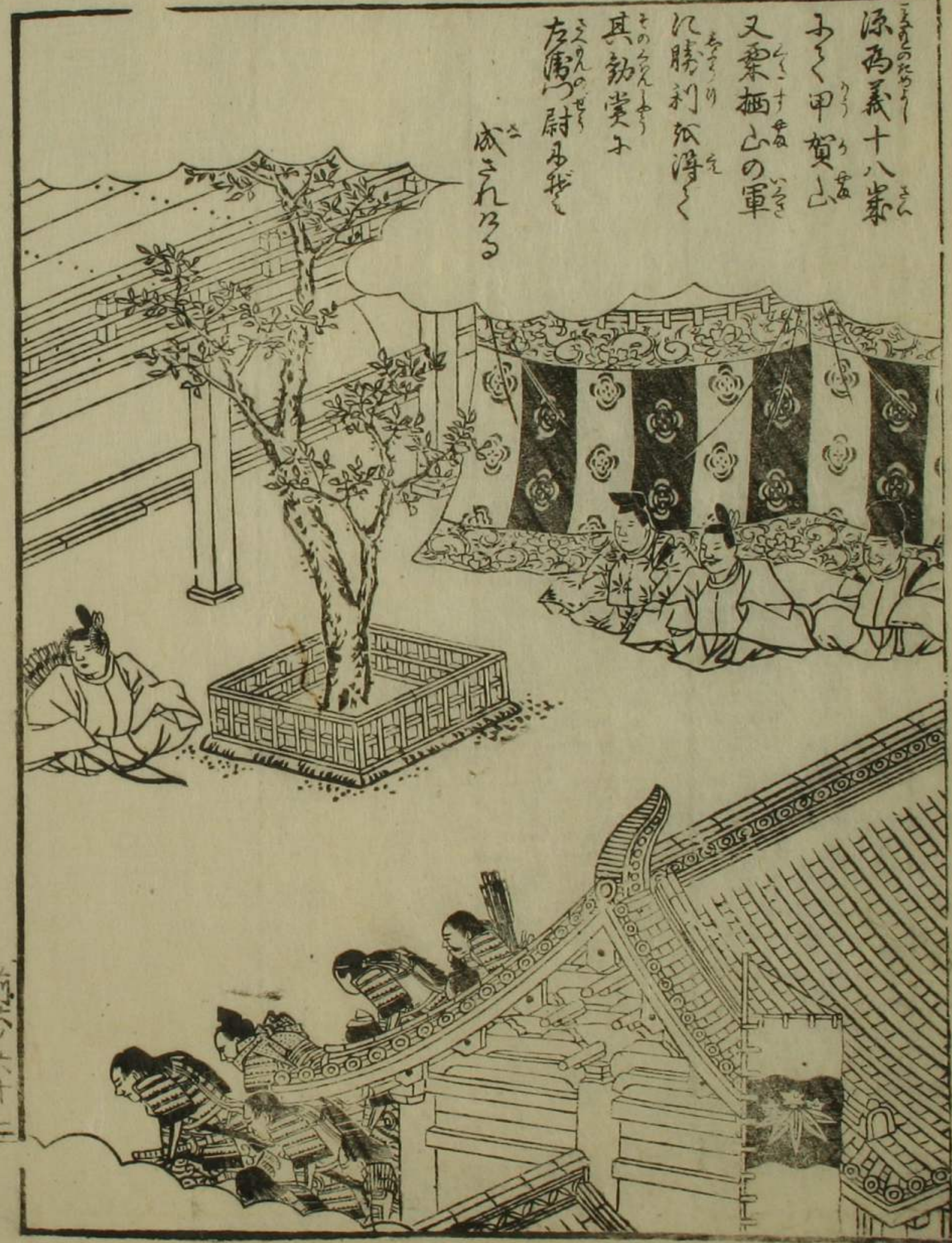
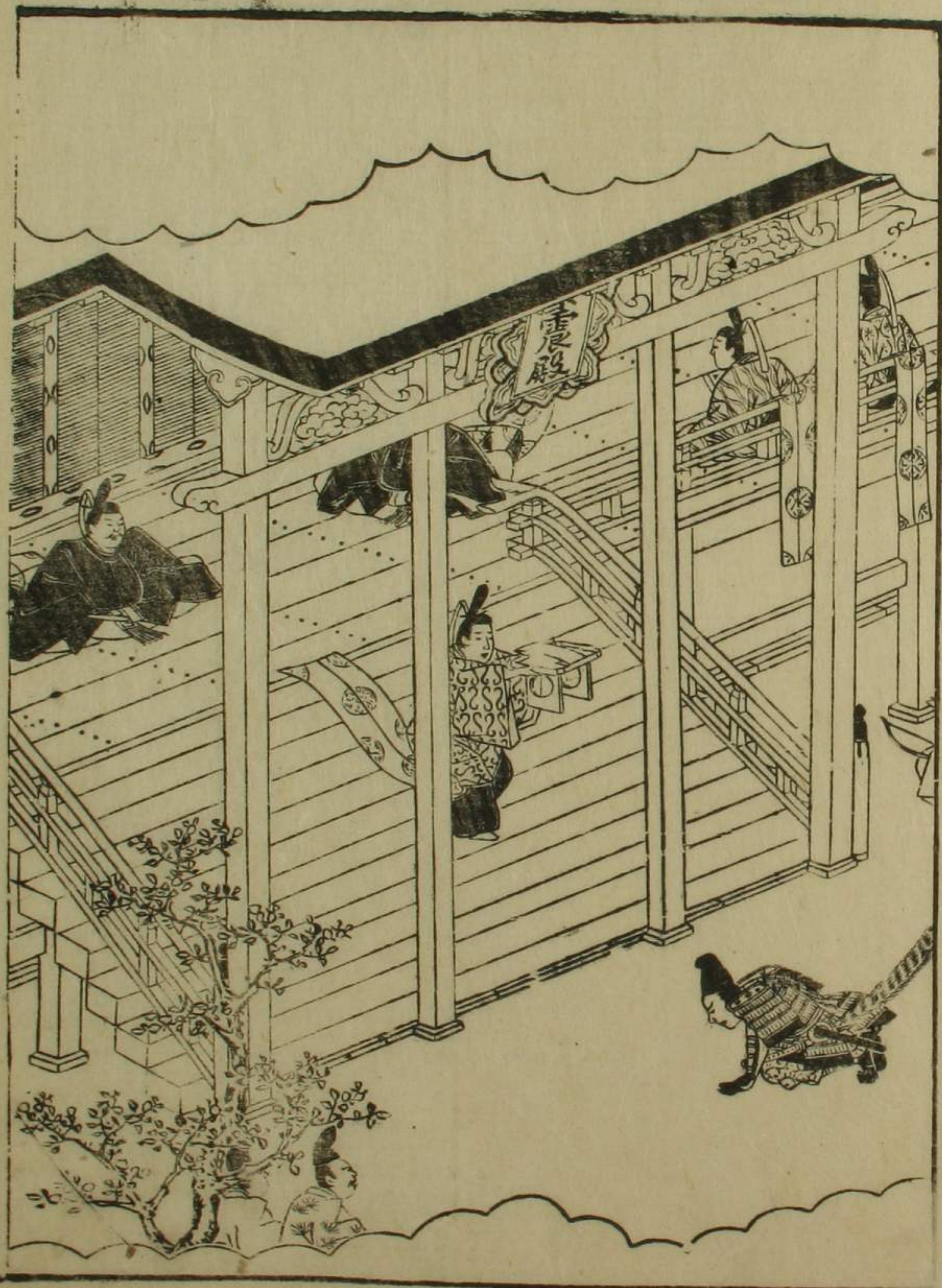
捕籠は為義討子とて其勢都合年五有幼孫少年の大将を守り甲賀山へ
駒と吳濃守義忠と連に國小下居りて甲賀山小城廓と捕へ討子
たる小甥の為義向ふと聞くと何程の幸かあそと軍將といまご
さらなる去程不討ふ此勢門止日己刻申賀山に居る岡を上下
古井たし入丸と政合せ陣と事い難とて一夜三百回息とも
くせし死傷の者もまゝらりて攻るも防ぐも修へ孫氏の好齋少く
や成士年い骨肉の兄弟朋友東西小分とては後日恥辱思ひは
孤宗とて一戦し修へ何とて小隊も足らざるを修へ祈りし
そ思ひ小子痛かけはとて分捕も命あつては修へ河の邊か
心孤籠しとて狐谷を廻りて抜く小落のり後之城中以外無勢
騎小好已然も半の合戦の即ち修へたり小子良義弘義俊義純等
壯士也と腫瘍者の方人足子修へ何とせんと修へ修へ修へ修へ

進退不_レ知_レて身命孤_レ防_レが敵のなる小_レ本城を究_レの要_レ渡_レられ又_レ牛角
 の軍小成に_レ斬_レる官軍教日_レ行_レく攻_レりけは同_レ城中の兵_レども大半_レは_レ恩_レ義_レ弘
 義_レ後_レ義_レ龍_レも討_レた_レ一_レ路_レの_レ義_レ綱_レも_レ利_レ入_レ道_レ深_レ長_レの_レ等_レも_レく_レ勝_レ人_レ出_レ出_レけ_レる
 ば_レ我_レ洋_レ小_レ奉_レ圖_レあ_レむ_レ死_レ罪_レと_レ宿_レを_レ我_レ德_レ入_レ道_レ深_レ遠_レへ_レ流_レされ_レる_レ又_レ刑_レ部_レ聖_レ義_レ光
 物_レ居_レ今_レ然_レの大_レ送_レ其_レ福_レ中_レあ_レつ_レけ_レれ_レも_レい_レつ_レる_レ富_レ世_レの_レ果_レ報_レか_レあ_レる_レは_レ其_レ也_レと_レ竟
 以_レ知_レか_レわ_レく_レて_レ生_レ涯_レ豊_レあ_レく_レ後_レ也_レ祝_レ繁_レて_レ刑_レ部_レ入_レ道_レと_レ終_レけ_レり

為_レ義_レ武_レ勇_レ賜_レ勸_レ賞_レ

爰_レ小_レ南_レ都_レ真_レ福_レ寺_レは_レ大_レ衆_レ山_レ門_レと_レ争_レ論_レの_レ幸_レあ_レり_レて_レ忠_レ負_レ由_レら_レ依_レ之_レ朝_レ家_レ弘_レ眼_レ安_レ吾
 成_レ世_レん_レ中_レ一_レの_レ惡_レ俗_レ蜂_レ起_レて_レ其_レ勢_レの_レ合_レ二_レ千_レ餘_レ人_レ其_レ日_レの_レ未_レ上_レ朝_レの_レ聖_レ祖_レの_レ也_レ我_レ唯_レ
 たる_レ上_レ院_レ甚_レ運_レ麟_レあ_レつ_レく_レ官_レ兵_レを_レの_レ門_レと_レこれ_レを_レ禁_レる_レて_レさ_レく_レ何_レの_レ也_レ我_レ唯_レ
 人_レ宿_レ垂_レし_レけ_レる_レ法_レと_レ奉_レた_レれ_レ云_レ々の_レ奉_レた_レり_レて_レ急_レ栗_レ栖_レ小_レ馳_レ白_レく_レ敵_レ防_レぐ_レ一_レ爰_レ
 と_レ殊_レる_レ續_レた_レく_レ疾_レく_レや_レ作_レら_レる_レ義_レ也_レの_レ也_レと_レあ_レる_レと_レき_レく_レ門_レを_レ出_レる_レが_レ今_レ日

及_レ與_レした_レる_レ即_レ答_レ十六_レ人_レ方_レり_レ馬_レ物_レ具_レ也_レと_レ要_レ意_レした_レる_レ者_レか_レく_レ也_レと_レ言_レれ_レ神_レ使_レ之_レ乘_レ
 て_レ私_レ宅_レ小_レ湯_レ之_レと_レ謂_レを_レし_レ其_レ之_レ面_レく_レは_レ馬_レ物_レ具_レと_レ取_レ法_レを_レ踏_レみ_レ出_レ合_レし_レと_レさ_レく_レ下_レ湯_レ教_レま_レ
 私_レ宅_レ小_レ走_レせ_レ馬_レ引_レ寄_レ打_レ系_レ禮_レの上_レ帝_レ高_レ紐_レの_レ馬_レ上_レり_レく_レ籠_レ車_レ一_レ自_レ徒_レ僅_レ十七_レ人_レ大_レ敵_レ成_レ
 亦_レ小_レ受_レ勅_レ宣_レを_レ重_レし_レ身_レ命_レ孤_レ防_レ今_レ二_レ條_レ弘_レ東_レ河_レ空_レと_レ下_レつ_レ小_レ馳_レる_レる_レを_レ義_レ也_レ思_レれ_レ
 け_レか_レか_レる_レ附_レ部_レと_レ神_レ使_レの_レ冥_レ助_レ小_レよ_レり_レん_レを_レ争_レり_レ早_レ速_レ大_レ功_レと_レ得_レん_レと_レく_レ馬_レより_レ花_レり_レ
 河水_レは_レく_レ手_レ洗_レ濯_レさ_レ違_レか_レる_レ清水_レの_レ方_レと_レ伏_レる_レも_レ中_レの_レ新_レ於_レ孤_レ迷_レれ_レる_レも_レ附_レ
 も_レ十_レ月_レの_レ重_レ月_レも_レあ_レく_レ傾_レる_レも_レ男_レ山_レの上_レ白_レ旗_レ一_レ流_レ雲_レ間_レの_レ風_レ小_レ籠_レく_レん_レは_レた_レれ_レ也_レ
 我_レ義_レ也_レは_レ瑞_レ駘_レ形_レど_レう_レ勇_レざ_レん_レと_レく_レ栗_レ栖_レ中_レと_レ急_レさ_レる_レ附_レと_レ移_レ進_レた_レと_レて_レ十
 七_レ條_レの_レ禮_レ弘_レ並_レさ_レる_レは_レ數_レと_レ數_レ出_レる_レを_レ先_レ陣_レの_レ衆_レ徒_レ二百_レ餘_レ人_レ思_レふ_レも_レ似_レた_レ小_レ勢_レ也_レ
 也_レ中_レ小_レ白_レく_レ付_レん_レた_レ元_レ來_レ十七_レ騎_レの_レ衣_レを_レ馬_レ上_レの_レ逆_レ若_レ形_レも_レ小_レ駿_レ足_レを_レ擡_レぐ_レ絶_レま_レく_レ
 廻_レる_レ逆_レ物_レな_レれ_レも_レ勢_レが_レ中_レ孤_レ蒐_レ廻_レり_レ十_レ文_レ字_レに_レ破_レく_レ通_レり_レて_レ小_レ在_レり_レと_レす_レは_レ其_レが_レ己_レ
 本_レ隠_レれ_レ須_レ臾_レも_レ千_レ變_レ万_レ化_レして_レ大_レ勢_レ却_レく_レ小_レ勢_レに_レ蒐_レれ_レる_レも_レ負_レ死_レ人_レ其_レ殺_レと_レま_レり_レ也



源為義十八歳
 少く甲賀山
 又粟栖山の軍
 以勝利を博す
 其功賞子
 左馬の尉を授け
 成されり

瘴徒の長長なりとも長遠定はれん身体弱き上より小唯會起るは弱く我はこれ
一騎而此は武勇の達者小菟をらるる先陣の瘴徒三百餘人包圍付りて引退くは
くかふ小治母さへは怪され死傷の者多し今も多勢加らるるに人々令生は
三我之敵の道原塞ぬるは一見も思く引ぐを先陣二陣三百餘人必弱く引く
る上條氏も流石小治母を逃るは長遠を以勝時流く勇とさし一重を海
去移ひたり時中為義十八歳主従僅十七騎も二千餘人の強敵を二我小追返
和漢へも先蹤公圍は為義奉用して合戦の強妻く奉圖とてられ公敵感料
好くは疎小今なの病ひを緩ゆるにだに元忽入海して洛中北駿動少かは強威も
怪れふ極く武威も腐く事りん也と不迷く特徳の大功成致せしと禁裡を
院津的も伊美院限かうる多明今なの勅賞ふは海尉小治を任せしむる實も
親授の形官之其後指非遠使也成るる爲義陸奥と全しこれに爲義
身小治く不吉なり祖父頼義と貞代宗但が私あり義家武備を教衛と実あり

遠信ある國なれば抱るべきは今君の義を信せしむる徳宗清衛が子孫を一定合
戦ありし化玉張るるべしとて強く勅件好うり多し爲義と又先祖の國を以て
して此國の領地をせんとして終不受領し好くは京都六條堀川に居しおろし
六條の官爲義を称しつて是より四條一元小治して弟氏四時と樂し弟小堂く忠
信小治く長年親くする徳宗御く干戈遂小細く弓矢を養ふは徳宗御く
清代なりなり

後

又いつて其子と知り圖あつてそれ如と人の言ふ時子丹平の化つた人
又圖と平しむ仍と平をまき家志より小右記の圖と加て世にてもおかしき
大平記の二款幼少慶承平の作り余かまき百餘年の事と取しほる者も上
又さういふ此比圖と加て再び持て世にても又取と平と平をまき
らん秀と平と持しつて全部と平をまきほる小右記の取れ知るは
うはあまきと平をまきつておかしきと有り治る者も乱と平をまき
ともちんくともちんく

法橋中如也

画圖

平安画貞

法橋中和



彫刻師

一ノ巻	野田專介	三ノ巻	中嶋勘七	五ノ巻	野田專介
二ノ巻	野田專介	四ノ巻	中嶋勘七	六ノ巻	山本長左衛門
					樋口源兵衛
					中嶋勘七

前六ノ六十四

大聖 靈驗經和訓圖會三卷

春屋織月齋老翁著
浪速松川半山人画

此書天竺の陀羅尼經の大意を初巻に見たり。其後易く難解なる經の要言
を以て撰録して和訓の形にして、其の利益を説きたる法外堅固なる一書也。後
巻の靈驗の事は、其の靈驗を説きたる法外堅固なる一書也。後巻の靈驗の事は、
其の靈驗を説きたる法外堅固なる一書也。後巻の靈驗の事は、其の靈驗を説
きたる法外堅固なる一書也。後巻の靈驗の事は、其の靈驗を説きたる法外堅
固なる一書也。後巻の靈驗の事は、其の靈驗を説きたる法外堅固なる一書也。

蕉窓方意解

東郭和田先生著
全二冊

朱子心學錄

明金銘王真輯
全三冊

方鑑圖解

松浦琴鶴先生著
全五冊

插花衣鉢香

遠洲流
全四冊

日要精義

同著
全二冊

同 柳八緑

遠洲流
全四冊

方鑑雜説

同著
全一冊

同 價名海

同流
全三冊

洋風堂藏

鈴木瀧洲先生著

温畫隨筆

全四冊

此書ハ國字ノ隨筆ニシテ雅俗ノ考証
ヲカキ學問ヲ心カクルニ甚ク益アル
故ニ博物家モ座右ニ置ベキ書ナリ

頭 遊仙屈鈔

唐張文成作 學士伊時點 全五冊

此書本邦ニテ中華ノ小説ヲ譯解スルハ
此書ヨリ以テ始祖ノ人嵯峨天皇ノ時學士
伊時ナルモノ神仙ノ譯ヲ得テコレヲ解ス
トイヘリ小説家必讀ノ書ナリ

忠臣銘々傳

粉色入 全壹冊

一勇齊國若畫
此書ハ赤松の義士四十セ個徳意の
美徳と譽して西國才大人の邪流を
垂ルル一物画手不の長よる利

造物趣向種

全一冊

此書ハ氏神の祭儀他種は會成ハ終ニ
そのその昔相と考ふる所ニシテ造物
人と其の時機不可分也出來の事あり
その時其書を以テ其書は石版印刷の
おこるゝてつづくにあつた用ひや、成
事なくもつたなれば事ふらして造物と
よりなる江人を考ふるに事あり

同 其編

近刊

星池泰先生書

和 對照書札

前後全二冊

漢朝人ノ當時應用ノ書牘ヲ和文ノ書
簡ニ翻譯シタレハ學向ニ益ニシテ且ツ
星池氏ノ書ノ尊養ナルヲ冀賞スヘシ

加藤在止翁著

太平國恩理談

全五冊

此書ハ和代太平國恩の巻海流を以て自
身胸中のたのしみを述ベ人ノ善行を以ての
徳意を外ニ有テ文ノ善美の自在を以て
人心を感ゼしむる未だ人の士而以て懐
悋の非を痛みる訓の士哉若述し其利
以して名をこゝんとするの利ひあらば
言はば天下國家の幸慶はつとこそ是れ小徳
やが、故ありがこと書ふれば半経俗界
女老少ともに能い其誠實を以て神
佛講の衆徒を以て其の信を以て
うけり能ふ事ありしめて其の功を
たふし美小塵古を以て其の功を

三教童論

全四冊

此書ハ三教童論の入門小童を以て
画はく見たりしらく和語を以て其の
語を林ありて其の事、忠孝の心を
知る女小童を以て其の事、忠孝の心を
知る女小童を以て其の事、忠孝の心を

玉葉齋教川貞秀画

古今武勇歌仙

小本 壹冊

此書古昔より武勇の名士の事ありて
和歌と集めて六歌仙と名づけし神代傳の事あり
由緒と其を考ふる其首領ありし事あり
時を以て且その人迷愛の事ありし事あり
ハ如きありてありし事ありし事あり
ハ一市道曲につくしてハ其の事あり
本重信の事あり

洋風堂藏

拙筆光太(撰)
題英叢白 全四冊

いづれもいづれも世に名のなきものありて、
いづれもいづれも世に名のなきものありて、
いづれもいづれも世に名のなきものありて、
いづれもいづれも世に名のなきものありて、

好華堂主人著
女重寶記 全一冊

いづれもいづれも世に名のなきものありて、
いづれもいづれも世に名のなきものありて、
いづれもいづれも世に名のなきものありて、
いづれもいづれも世に名のなきものありて、

前北齋記老人画
繪本彩色通 前後二冊

いづれもいづれも世に名のなきものありて、
いづれもいづれも世に名のなきものありて、
いづれもいづれも世に名のなきものありて、
いづれもいづれも世に名のなきものありて、

書 林

京都寺町通佛光寺	河内屋藤四郎
江戸日本橋通壹丁目	須原屋茂兵衛
同 貳丁目	山城屋佐兵衛
同 貳丁目	須原屋新兵衛
同本石町十軒店	英 大 助
同淺草茅町貳丁目	須原屋伊 八
同芝神明前	岡田屋嘉 七
同神田旅籠町壹丁目	紙 屋德 八
大坂心齋橋通博愛筋	河内屋茂兵衛
同心齋橋通本町角	河内屋藤兵衛

